

葛飾区史編さんだより

Vol.19

総務部 総務課 区史編さん担当係 03-5654-8444
郷土と天文の博物館 03-3838-1101

葛飾区



平成 27 年 3 月 7 日(土)午後 2 時から、お花茶屋地区センターにて「昭和の葛飾を何う会」が開催されました。

多くの方にご参加いただき、お花茶屋にまつわる様々なお話を何うことができました。



チョウセンブナ

お花茶屋駅には近隣の名所を案内する看板に「大小の池無数」と書かれてあったそうです。現在フナ釣りというと、霞ヶ浦など茨城県あたりまで遠征する人が多いようですが、昭和 20 年代はお花茶屋駅周辺が東京のフナ釣りの名所でした。細い水路や池には多くの魚が繁殖していました。

そうした釣りの名所で強く記憶されているのがチョウセンブナです。「池にも水路にもうじゃうじゃいた」というこの魚は外来種です。大正 4 年(1915)頃朝鮮半島から移入され、今のブラックバスのように、一時期は異常繁殖したようです。

ところが、どういわけか戦後激減し、現在はほとんど見る事が出来なくなりました。新潟県などのごく一部で自然繁殖しているにすぎませんが、独特の形状をしていることから観賞魚としてペットショップで売られています。

マツボク売り

プロパンガスが登場する以前、燃料の調達家事の中でも非常に重要な仕事の一つでした。農家と一般の住宅では少し事情が違いますが、農家では、ご飯を炊く燃料として稲の藁を使っていました。稲刈り後、稲の藁を「ボッチ」という形にまとめておき、一年間を通じて使います。藁は火力が強く、おいしいご飯が炊けました。しかし、一定の火力を維持することが非常に難しいため、ご飯を炊く役割を担うお嫁さんはたいへん苦労しました。

風呂焚きにはハンノキを使いました。ハンノキは田んぼの畔に植えておき、稲木(刈り取った稲を束ねて天日干しできるように横木を何本か掛けて作ったもの)の柱にしました。このハンノキは非常に成長が早く、しかも太くなってしまうと稲木の柱として使いにくいので、適当な大きさのものは切り倒します。平均して年に 3 本くらいは切り倒すので、それを風呂焚きの薪にしました。一年間の風呂焚きの燃料はだいたいこれで間に合いました。燃料としては非常に火力が強く「薪のハイオク」という人もいます。

こうした家庭用の燃料を補充するために、松戸や流山から行商の人が売りにきた松の木(マツボク)を使うことがありました。これは北総台地の赤松で、火力が強く火持ちが安定していたので非常に便利でした。

江戸川の東側の低地の農村はもともと林が少なく、北総台地の林から薪を求める伝統がありました。我孫子市や松戸市の農家では松を燃料として販売することを冬の間の副業としていて、切り倒した松の枝をまとめるのは農家の女性の仕事でした。葛飾区は、三郷市や吉川市などと比べると都市化が早く、とくにサラリーマンの家庭では石油コンロなどが使われるようになったのが早かったようですが、今回の「何う会」で葛飾区でも燃料として北総台地の松の木が使われていたことが確認できました。



下千葉商店会

1000円のボーナス がどつりあなたに
当たった金券が加盟店でお好きな品と引換えられるゴキゲンプラン…!

7月4日～7月8日(5日間)

中元福引連合大売出し

加盟店+

田中洋品店
 玉井商店
 花も惣菜店
 宮青果店
 山中豆腐店
 魚音商店
 和田精肉店
 相川食料店
 旭屋酒店
 木村屋本店

下千葉商店会

東堀切一丁目には下千葉商店会という商店街があります。左の写真はそこで精肉店を営んでいた方がお持ちになったもので、昭和 33 年に開店を記念して撮影されました。丸太を組んだやぐらにたくさん吊るされているのは建築業者や親しい商店から送られた開店を祝うビラ絵です。店先では「ちんどん屋」さんが風船を配っています。

下千葉商店会は小さいながら昭和 30 年代から 40 年代にかけて栄えた商店街で、10 軒以上の店が軒を連ねていました。この写真からその賑やかな様子をしのぶことができます。

商店街に代わって大型小売店舗やコンビニなどが台頭しましたが、賑やかで活気あふれる下千葉商店会には今も 2 軒のお店が健在です。

水道いつ通る？

大正 15 年の金町浄水場完成当時、その水はまだ葛飾区域に供給されていませんでした。供給が始まるのは、昭和 8 年以降のことです。おおまかに述べると、新興住宅地や人口密集地から水道が開かれたため、農村部は供給が遅くなりました。今回の「伺う会」に出席された方のなかには東堀切(下千葉)の新興住宅地の方も西亀有(上千葉)の農家の方もおられましたが、このふたつの異なる地域への水道の供給の年代は大きく異なっていることがわかりました。

東堀切の京成分譲地など、新しく農地に作られた住宅地の中には戦前の時点で「ガス水道完備」というところもありました。しかし、そこからそう遠くない上千葉の農家の方々の記憶では「水道が通ったのは昭和 30 年代に行われた区画整理以後」とのことです。

「区画整理が終わらなければ水道管はこない」のでそれまで井戸水を使っていました。井戸水は砂や棕櫚(しゆる)の葉で濾して飲みました。

お花茶屋地区のように農村が急激に都市化した地域ではインフラ整備も一様ではなく、古い伝統的な暮らしが近代的な都市生活の中に残っていることがあったのです。

米作り

上千葉や下千葉では、葛西用水を使った稲作が盛んに行われていました。下千葉では「ミトラズ」と呼ばれるしめ飾り用の藁を取るための稲が作られていましたが、米は自給用でもあり、戦時下は国民の食糧をまかなうために供出を求められました。

下千葉は概して湿田が多く、冬でも水の切れない農家にとっては作業のたいへんな水田が多くありました。上千葉も昭和 40 年頃まで水田がありましたが、都市化が進んでからは、葛西用水の水質も米の質も悪くなりました。

最大の原因は、都市化して増えた住宅の生活雑排水が農業用水路に流れ込んだことでした。用水路が泡立っているときもあり、そうした水を使った水田でとれた米を脱穀精米すると粉になってしまったこともありました。

かつて用水路では野菜も洗っていましたが、上流の大工場からの排水が葛西用水に流れ込むようになると、野菜に匂いにつき、市場でも話題になるほどでした。そこで、農家はどこの家でも家の中に洗い場を設けて野菜を洗うことを徹底しました。「井戸水で洗うより水道の水で洗った方がいい値段が出る」とも言われていました。

昭和 40 年代になると農業を取り巻く環境は厳しいものになり、農業用水を使うために支払う用水費を徴収するときも「使えない水を流しておいてなにが用水費だ」と苦情を言う人もいました。